

開催地名	大阪府忠岡町
開催日時	令和8年1月18日(日) 10:00 ~ 12:00
開催場所	忠岡町ふれあいホール
語り部	井上 達彦 (宮城県石巻市)
参加者	自主防災/防火協力会関係者・町会議員・忠岡町職員関係者 80名
開催経緯	大阪湾沿岸部に位置している忠岡町は、南海トラフによる海溝型地震や、上町断層による直下型地震を想定して、東日本大震災や阪神・淡路大震災を教訓とした、防災訓練や避難訓練を実施している。また訓練実施にあたっては、町内11団体の自主防災組織が中心として活動しているが、近年、大規模災害を経験したことがなく、防災意識の希薄化も垣間見える理由から、自主防災組織の意識向上及び組織強化を図る取り組みのヒントを得たい。
内容	<p>(1)東日本大震災について</p> <p>2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0の地震が発生し、日本では観測史上最大の地震であった。犠牲者は全体で約22,000人の死者が出てしまい、関連死は含まれていない。今でも行方不明者がいるのが現実である。</p> <p>毎年3月11日になると、海岸沿いで遺品探し、遺骨探しが行われる。昨年は顎の骨が一部発見され、DNA鑑定により14年ぶりに遺族のもとに帰った事例もある。犠牲者22,000人の中で、宮城県の石巻市の死者・行方不明者が約4,000人であった。震災前人口は160,000人、現在30,000人の減少。災害被災者数が約50,000人となっているが、在宅避難者の数は入っていない。市内128,000棟の家屋があったが、そのうち全壊したのは44,000棟にも昇る。</p> <p>家屋の倒壊で亡くなった人は少ないが、津波による被害の水死、溺死、低体温症で亡くなった人が多かった。それほど大きな津波が来るとは想定していなかった。北上川を海岸から大津波が襲い、岩手県境の49キロまでの距離を津波が遡上した。被災者たちは仮設住宅生活を強いられ、復興住宅が建つまでも数年かかってしまった。「もうだめだ、いつまでも仮住まいはしたくない」と、故郷を離れたくない被災者たちが海岸から移住、移転するようになり人口が減少してしまった。復興事業の遅れが影響した結果である。</p> <p>(2)防災の活動を始めるきっかけ</p> <p>地震発生直後には、さほど被害は感じなかった。当時、津波警報が発令されたため家内に避難するように伝えたが、家内は「大したことないよ、大丈夫。ここまで津波は来ないから」と安心しきっていた。私は一人暮らしの義理の母の様子が気になり、義母の家に車で向かった。幸いにも義母の安全も確認できたので自</p>

宅に帰ろうとした途中、津波が襲ってきていると耳にした。自宅にいた家内は、窓の外で真っ黒い津波の塊が押し寄せて来るのを目にして2階に避難した。1階は完全に浸水してしまったが、家内も無事に一命を取りとめた。私も自宅が出るのが少しでも遅かったら、途中で津波に飲み込まれ、逆に早く戻っていても津波に遭遇してしまっていたのである。

そのとき、自然の力を甘く見ていたことを心から反省したのである。なぜ大きな地震が起こったとき 大きな津波が来ると思わなかったのだろうか。津波予想があったにも関わらず、なぜ軽視できたのだろうか。

今でも思い出すのは、土煙が立ち込め、建造物を車も火災も飲み込んだ津波は真っ黒になっていた。その真っ黒な光景の中に、1台の幼稚園バスがある。地震が発生したため、親元に一刻も早く園児たちを送り届けようと、山から海岸沿いに下りている間に津波の被害に巻き込まれたのである。そして火災が発生し亡くなってしまった。これは天災でなく人災である。

(3)避難所の様子

避難所となった学校の体育館では、人がすし詰め状態になっており、もちろんプライバシーもあるわけなく、人が通ればほこりが舞うほどのスペースしかなく、床にごろ寝状態であった。そのうえ停電・断水のためトイレが使えなかったため、結果トイレを我慢するのに水を飲むのを控える。だから体を壊す。完璧な悪循環が形成されてしまったのである。

能登半島地震ではパーティションや段ボールベッドなどの救援物資は何日も届かず、かなり初動の支援が遅れてしまった。日本は先進国であるはずなのに最低な避難所の環境であった。それまで何十年も変化がなかったのだが、比べて台湾やイタリアは避難所における初動対応は優れている。

コロナが発生したことをきっかけに、避難所の2次感染問題は見直され、今ではパーティションで仕切ったり、収容人数を制限したり、仮設ベッドを備えたりと行政を筆頭に徐々に改善の兆しが見受けられる。

(4)石巻市の支援制度

石巻市で「防災士資格取得支援制度」が、地域防災力の向上を目的に制定された。417名が防災士の資格を取るきっかけとなり、私もその内の1人である。ただ、資格は取得したものの、なかなか活動の場がないため運転免許証というペーパードライバーと同じである。

活動の場さえあれば、その資格を少しでも活かせると思い立ち、市に協力を仰いでまずは資格者にコンタクトを取り、一緒に活動をしたいという資格者を募った。最初は1人から、そして2、3人と仲間が増えていき、設立準備委員会設置

の呼びかけには 30 名が協力を申し出てくれた。そのおかげもあり、3 年間で約 170 名の資格者が賛同してくれたが、ちょうどコロナが蔓延したときに数年は活動できずにいた。

(5) 石巻市防災士協議会

私たちは大震災の教訓や経験を踏まえて、2019 年 5 月 26 日に石巻市防災士協議会を結成し、現在約 130 名が加入している。「行政と民間をつなぐ役目をしよう。」「二度とこのような災害で犠牲者が出ることを防ごう。」そして、自分たちの力が役に立てるのではと、発災前の活動に重点を置こうという目的で結成したのである。現在 7 年目を迎え活動中である。

(6) 石巻市防災士協議会が取り組む柱

① 行政機関との連携

② 地域防災力向上への取り組み

③ 学校防災活動への取り組み（とくに小中学校）

→ 震災を知らない子供に伝える。災害時は中学生・高校生が戦力になってくれる。

④ 市民への防災意識啓蒙活動

→ 防災とは何か？問いかけていく

⑤ 安否確認方法の普及啓発活動

会員の中には町内会役員・民生委員・消防関係・看護師がいたのだが、最初は人脈を辿ることからスタートした。学校に行くにも地域の学校の PTA 役員や、安全担当の先生と連携を取る必要があり、みんなが賛同してくれたおかげもあり、会の活動ができるようになったのである。現在、170 名の会員から 130 名に減少しているが、今もなお活動を続けている。

特に「備え」を大切にしており、物資ではなく「物」「心」、すなわち心構えが必要であると考えている。災害とは地震、津波だけではない。大雨、川の氾濫被害も有り得る。

災害が起きない場所は無いので、いざという時に備え、予想もしていなかったと悲観するのではなく、いつどこでどんな災害が起こるかわからないという心構えを持つことが大事である。

食料品の備えは、防災食を備蓄する必要はなく、普段食べているものを少し多めに備蓄し、食べたなら消費した分を新たに買い足す、ローリングストックで循環をさせれば常に新しいものを備蓄できる。

今でも備えに対する意識が薄い人もいるのが事実であるが、逆に支援する側もトイレ問題を抱えているのである。人間は「食べないこと」は我慢できるが、「トイレ」は我慢することができない。何百人も避難民を抱えることになる避難所で、トイレが不衛生であったり、仮設トイレの設置台数が追い付かなかったりと事態は深刻である。まだまだ解決すべき問題を山積みに抱えている以上、我々自身でも非常用トイレの携帯や、凝固剤を家族人数分ストックすることなど「備える」ことが大切である。

(7) 「自助」「共助」「公助」の考え方

人は「公助」、すなわち行政に対して要求しがちであるが、一番重要なのは「自助」「共助」ではないかと考える。その上に「公助」が成り立つのではないかと考えている。

「自助」自分の命は自分で守る

- ・近隣の危険個所を調べる。避難経路、避難場所を調べる
- ・非常持出品を準備する。人によって必要なものは違う。

季節によっても必要なものが違う

- ・食料、飲料水、非常用トイレの準備
- ・女性の生理用品、いつも使っているものをストックする
- ・家族の安否確認方法
- ・家具の転倒防止、安全な配置の確認

「共助（近助）」自分達の地域は自分たちで守る

- ・自主防災組織
- ・工夫を凝らした避難訓練の継続
- ・近隣とのコミュニケーション
- ・図上訓練の実施（HUG/DIG等）
- ・要支援者対応の訓練
- ・車いす利用者の避難訓練、坂道で実際に車いすを押しながら走ってみる

「公助」物資の供給、避難所の開設

- ・有事の際は3日から1週間後に手に届くが時間差が生じる
- ・地域の努力が必要不可欠。

(8) 命を守る活動

我々の活動では、発災前や平時にどうするかに力を入れており、自分の命を守ることに力を入れて考えるからこそ、発災後の対応に繋がると考える。

いつも通りの顔見知りの方々に、なんとなく避難訓練を行うのではなく、何か問題がないか改善点を探し、その見つけた問題・改善点を次に活かすことが訓練である。

避難所の運営は地元の人たちが行うべきことであり、避難者と地域住民が自分たちでルールを作り、自分たちで決めた運営に問題があれば話し合う。行政が運営する避難所は不満が多く、うまく運営できない傾向にあるので、そうならないためにも自分たちで快適な環境運営を図ることが大切である。

《 石巻市防災士協議会の活動 》

1. 避難訓練支援活動（町内会・防災会・自主防災会と協力）
2. 避難所開設訓練活動（対象：小中学校・市職員・防災センターなど）
3. 学校防災教育活動（防災まち歩き・グッズ作り・防災マップ作り・公衆電話教室・防災講話・段ボールベッド組立など）
4. 女性防災士の集い（防災ポーチ作り・非常時におけるパッキング・段ボールベッド組立訓練・ママサポートセンター依頼防災講話など）
5. 会員向け各種セミナー



開催地より	<p>災害時の「自助・共助・公助」について分かりやすく解説いただき、平時や災害時における防災活動は、「自助・共助」が重要であることが理解できたかと思う。</p> <p>東日本大震災発災初期の被災地の写真などを元に講話いただいたので、災害をとってもリアルに感じる事ができたかと思う。</p> <p>また、災害時の市の防災に関する取り組みや石巻市防災士協議会について設立からの活動経緯と避難所開設の事例を紹介いただき経験からの教訓をいただいた。今回の講話を聴いて忠岡町の地域住民でもできる防災活動のヒントはあったかと思うので、地域と行政が一丸となって、防災活動を進めていきたい。</p>
-------	---